

奇跡の5分間ーインドネシア・スラベシ島

東京理科大学天文研究部日食観測隊（スラベシ隊）室 伏 礼 子

まさに奇跡の5分間であった。第Ⅱ接触直前まで雲の中にいた太陽がコロナを我々に見せるため雲間からボンと飛び出した、そんな感じさえした。

東京理科大日食観測隊スラヴェシ隊は、マワンという町（村）にある空地を観測地として選んだ。スラヴェシ島最大の都市ウジュンパンダンから車で30分。皆既中心線から40km。日食前々日の観測地下見の際、隊長が“何かを感じるものがあった”と選んだこの土地は平坦な草地で、周辺にある樹木は低く、特に視界を遮るものもない、観測地として絶好の条件を備えている土地であり、遠くにはこの地方特有の高床式の家屋も見え、異国情緒にも富んでいた。

観測地では現地のMilitary Policeが日食前日のリハーサル時より警備についてくれた。日食当日は、観測地に現地のビール会社～ビンタンビール～の出店まで出る程の大騒ぎ。当日バスで観測地に到着した時、あまりの見物人の多さに、本当にここが前日リハーサルをした土地であろうかと思える程であった。そのような状況下、気象用ポールを建て、望遠鏡やカメラ三脚を東西線上にズラーと並べた我々総勢27人が、見物人達に邪魔されることなく観測に専念出来たのは、この地方での最高位の人まで出陣して警備に当たってくれたMP達のおかげであろう。当日の気温31度。涼を取るためにと現地の旅行社が用意してくれたパラシュートのお古を利用したテントが2張、トイレも設置され、観測地としての設備は万全であった。

だが、日食当日の朝、空を見上げた隊員たちの心は穏かではなかった。低い雲がある。あの雲のあたりで皆既になるのではないか。空模様はバスで観測地に向う間も、機材をセットする間も変わらなかった。第Ⅰ接触は青空をバックに観測出来た。が、左上より削られ始めた太陽は徐々に雲の群に近づき、食分が進むにつれ雲に隠される時間が長くなる。食分80%の頃だったか、“フィルター無しでも写真が撮れて便利”などというこぼった冗談が聞こえたのは。

奇跡は第Ⅱ接触直前におきた。糸のように細くなった太陽が雲間に飛び出した。歓声が上がった。“シャドーバンドが見える”“ダイヤモンドリング”月に完全に隠されんとする太陽の最後の輝き。その輝きが消えコロナが広がる。“羽を広げた蝶のよう”“繊細でレース編みのよう”流線一本一本が確認出来るコロナに歓喜の声が上がる。シャッター音が響く。皆既中雲の通過によって一瞬阻まれはしたが、我々は5分間のコロナと2つのダイヤモンドリングをほぼ完全に観測することが出来た。第Ⅲ接触後務めを終えたが如く雲の中にはいった太陽は、その後日食継続中であることを知らせるように時折姿を見せるだけで、ほとんど雲の中にいた。皆既後、食分90%時に乾杯。胴上げ。この観測地にもう1組だけ観測に来ていた米国加州工科大学の物理学者夫妻も“Exciting”と叫びながらやってきて乾杯に加わる。第Ⅳ接触は完全に雲の中。機材を片付け、言葉も通じぬままMPや見物人達と交歓写真撮影会。バスに乗り、優勝力士の凱旋パレードの如く沿道に立ち並ぶ人々に窓から手を振りながらホテルに戻った。